

行政や産業界との共同研究

国際高等研究所では、これまでの研究活動の蓄積やネットワークを活用して、学術的な観点から、行政や産業界との共同研究に積極的に取り組んでいます。

行政との共同研究

日本文化創出を考える

平成31年度けいはんな学研都市・文化力強化推進事業（京都府）

関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）は、そもそも学術や科学技術の研究のみをその使命とするのではなく、古には都として文化の中心であったこの地域に相応しい「日本古来の伝統文化」と「先端科学技術」の融合からなる新たな「文化活用力」を生み出していくことが求められている。それを実現するため、「文化」を都市名に冠する本地域において、日本文化は何かという視点での思想的な探求と、その活用のあり方を研究する。

参加研究者

氏 名	所属・役職
西本 清一	京都高度技術研究所理事長、京都市産業技術研究所理事長 京都大学名誉教授
内田 由紀子	京都大学こころの未来研究センター教授
熊谷 誠慈	京都大学こころの未来研究センター准教授
高橋 義人	平安女学院大学国際観光学部特任教授、京都大学名誉教授
徳丸 吉彦	聖徳大学教授、お茶の水女子大学名誉教授
長尾 真	国際高等研究所学術参与、京都大学名誉教授

研究目的と方法

これから50年、100年先のことを考えると、進歩史観とは異なる歴史観や世界観を持たざるを得ない。文化を顕在化しないまま経済的な繁栄を求めてきたところに、文化に目を向ける一つの大きなチャンスがある。戦後の経済発展を通して置き去りにされた文化に価値を見出す時代の実現のためにはどのような施策が必要か、以下の視点からまとめる。

①「日本文化とは何か」という視点を中心に置き、様々な分野の専門家によって多角的な分析を深めることを通して、「日本らしい」と言われるものが何故そうであるのかといった背景に迫りつつ、日本文化を思想的に攻究し、更にはその活用のあり方を模索する。

②過去からの文化や技術と断絶し、最新の技術だけをベースに構想する



のではなく、伝統的技術や技の活かし方、デザインの活用など、伝統と先端科学との融合を前提に構想する。

③けいはんな学研都市の産学公民の各ステークホルダーに問いかけたテーマを設定し、参加者との対話を通して文化活用力の強化のあり方について議論する。

④けいはんな学研都市立地企業等との文化力に係る共同研究可能なテーマを吸収し、将来的には実証実験等の実施や事業化に資するよう、より実践的な活用がなされる活動を組み入れる。

2019年度実績報告

文化の創造は、人間の日常的な活動の場となる都市の構造と機能を基礎に展開される。千三百年の長い歴史を経て蓄積された京都の文化資産に照らし、これからの京都の新しい文化創造の在り方を考えるとともに、20世紀末に新しく発足したけいはんな学研都市が文化学術研究都市として、世界が認知する都市に成熟するために何を考えるべきか、さらには、日本の伝統を踏まえた新しい文化を創出し、世界に広めてゆくために、どうすべきかを検討した。これらの未来創造型の都市モデルは、これからの日本の地方分散政策を踏まえた都市創りのモデルとして大きな役目を果たすことが期待される。一年間の議論を総括して、以下のとおり報告書をとりまとめた。

第1章：目指すべき文化創造都市のイメージ

・未来社会の担い手となる子供たちの健全な育成、創造的な活動の源泉、環境破壊を防ぐためなどの基盤として、豊かな自然を享受できる住

環境、自然に働きかける環境を整備する視点が重要である。

・地域の持つビジョンの作成や暮らし向きに対する主観的な満足感、地域住民相互の信頼関係や安心感が、住民の幸福と健康に資するものとなる。

・多様な人々が自分の意見や状況を他者に何らかの形で伝えることができるような場所づくりには、閉塞的な雰囲気にならないような多様なチームづくりと、そのチームが行政とうまく連動していることが重要である。

・自動運転システムなどの先端技術を活用し、移動が簡便・廉価で迅速な地域インフラの整備が必須である。

・在宅勤務が容易にできるようなインフラの整備を進め、毎日の通勤などにかかる無駄な時間をなくし、家庭生活の充実が図れる環境整備が望まれる。

・地域社会の持つ伝統・文化や地場産業を再認識し、保存継承するとともに、現代の情報社会の中で発展させる工夫をし、そのためには優れた技術者集団と優れた芸術家の協力が必要である。

第2章：京都の将来設計

・神社・仏閣、町家などの建築物（有形文化財）の保全は、文化都市としての経済的発展にもつながる。

・伝統的な無形文化財の継承発展のために、自然にやさしい「和風生活」を体感するような体験型の機会を増やすことが、消費や観光の促進に大きな意義がある。

・祭りやイベントなどの行事は、世代を超えたつながりもできるので、社会貢献というやりがいから、自己肯定につながる。

・京都では町衆文化が民衆芸能や学問の基盤を支え、学問・芸術などの文化価値を絶対評価する目利きの風土を生み出した。そのような大学都市京都の特色を生かして、多様な文系、理系の学問的・社会的課題について、「研究者 in レジデンス」形式で討論し、世界に発信するシンポジウムが考えられる。

・芸術、伝統工芸、伝統芸能などの分野についても、国際的なシンポジウムやコンクールの開催、資格の授与などを行い、京都の活動が世界的な関心と呼ぶことができる。

・『ものづくり文化』は、京都の伝統的な美術工芸をルーツとした、技術と芸術が融合一体化した概念で、文化価値を伴った技術であり、大量生産システムの基盤を支える生産技術のイノベーションに欠かせない要素である。前2項の活動を通じて、京都の魅力ある地場産業商品を世界に売り出す戦略と努力が求められる。

・外国人観光客が日本の文化を「体験する」という意識を持てるように、日本の礼儀、道徳、禁止事項を周知していく。日本人の観光客が率先してマナーを向上させ、外国人観光客に対して範を示すことも大切である。

・特定地域に集中しがちな観光客を周辺地域に分散するためには、各地

域の文化財や文化遺産を紹介する取り組みや、インターネットを活用したインフラを整備していくことも大切である。

・京都市街地は自然が少ないので、周辺の山々に散歩道、サイクリングロードなどを整備して住民が散策しながら自然を楽しめる環境づくりについて検討の余地がある。

・多数の観光客が訪れる京都は、公共のスマート自転車シェアリングシステムの構築とインフラ整備を積極的に進め、交通渋滞の緩和を図るべきである。

第3章：けいはんな学研都市の将来設計

・住民の健康を24時間オンラインでチェックできるインフラを備え、多様な緊急事態に対処できる「住民健康都市」づくりに取り組むべきである。

・「自然との調和」という理念に立ち戻り、国際的に誇れる、日本を代表する歴史、豊かな地域特性をもつ文化を活かした街並みの形成を目指し、もっと緑を増やし、緑あふれる街づくりを考えるべきである。

・公共交通バスやタクシーなどの自動運転システムの実現、無人のコンビニやマーケットでの便利な買物、家庭内での自動的な電力消費最小化など、できるだけ無駄を省ける設備とそれを効率化するAIを導入すべきである。

・けいはんな学研都市での文化形成には、諸研究所の人たちの交流の場が必要不可欠である。「祭り」や「赤ちょうちん」などを通じて、研究者たちが地域住民とも親しめる環境の整備が大切である。

・子供たちのための幼稚園、国際学校などの建設、あるいは英米の学校の積極的誘致などを考えることが大切である。

・地元住民との交流を円滑にするために、あらゆる公共の場に機械翻訳システムを導入すべきである。

・現在KICK（けいはんなオープンイノベーションセンター）に入っている京都国立博物館の収蔵庫機能を拡張し、文化財の保存修理と展示、さらに研修の場として、国際的な研修教育機関（大学院レベル）を設立するような展開が考えられる。



今後の計画・期待される効果

2019年度に整理された日本文化の活用に対するアプローチをさらに深掘りしていく。AI技術の発展によって新たな余剰の時間が生まれつつある近未来社会に向けて、人間と精神文化の新しいパラダイムを洞察する。今日のような社会活動全般が制限されるような状況における文化活動の在り方についても考察していく。新しい生活様式を模索する上で、文化の本質、人間にとっての文化の必要性、心のつながりを検討し、文化の新しい活用方法を提案する。

また、2019年度のまちづくりの提案について、地元自治体や立地機関、住民とともに議論を展開し、文化を基盤とした街のあり方についてのターゲットと手法、プロセスをデザインしていく。それらの視点を通して「先端的学術文化芸術都市宣言」の策定を目指すとともに、関西万博に向けて日本文化の活用方法を検討していく。